

Title	言語再活性化運動とニューノーマルの実践 : コロナ禍のハワイ語ウェビナー‘Ai Kōleを事例として
Author(s)	古川, 敏明
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022, p. 14-23
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91557
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

言語再活性化運動とニューノーマルの実践 —コロナ禍のハワイ語ウェビナー‘Ai Kōle’を事例として—¹

古川 敏明

1. はじめに—ニューノーマル—

当面コロナウィルスと共存するという意味でニューノーマルという言葉が使われるようになって久しい。ただ、この言葉が何を意味するかは、使用状況によって違うようだ。例えば、2020年7月、*The Economist* 紙は *The new normal* という見出しの記事を掲載し、パンデミックはまだ始まったばかりであり、ウィルスに対抗するには多くの人々がニューノーマルの規則に従うことが不可欠だと述べている (*The new normal*, 2020, July)。ほぼ同時期に掲載されたアメリカ・ハワイ州の地方紙 *The Honolulu Star-Advertiser* では、リモートワークが「オフィスのニューノーマル」 (“*The new normal for offices*”) の一例として言及されている (Wu, 2020, June 8)。しかし、半年後の2021年1月に同紙に掲載された別の記事では、ワクチンの承認を受け、「今年からニューノーマルが始まる」 (“*The new normal will begin to declare itself this year.*”) と述べられている (Zunin, 2021, January 2)。これらの例に基づくと、ニューノーマルとは、コロナウィルスの登場によって生じた新しい現実を意味しているが、ワクチンの登場などによって更新され、また別の新しい現実が生じていくものと捉えられる。

本稿では2020年のアメリカ・ハワイ州の社会状況を振り返り、当時、ハワイ語再活性化運動の実践者たちが新しい現実にどのように向き合っていたのかについて明らかにするため、コロナ禍で始まったウェビナー（ウェブセミナー）における相互行為をデータとし、ホストとゲストがハワイ語で互いに感謝の表明を行う連鎖を分析する。ウェビナーの参加者たちが感謝を行う連鎖を分析することで、ハワイ先住民コミュニティの社会関係が構築される様子を目の当たりにすることができるだけでなく、参加者たちが従来の規範を用いて、新しい現実に対処する方法に光を当てることができるというのが本稿の主張である。

2. 背景

2.1 2020年のアメリカ・ハワイ州の社会状況

本稿で分析するデータを社会的文脈に位置付けるため、ハワイ州で実施されたCOVID-19への一連の対応を振り返っておこう。まず、2020年3月18日には、複数のキャンパスで構成されるハワイ大学システムが、5月のセメスター終了までオンライン授業を延長することを通知した (UH News, 2020, March 18)。3月25日からは州政府が4月までの行動制限、いわゆるロックダウンを実施した。（その後ホノルル市では5月まで延長。）3月26日からは州外からの移動に14日間の隔離期間が設けられ、観光客も含めた人々の移動がさらに制限されるようになった。州内のハワイ諸島間の移動に伴う隔離期間は6月16日に撤廃されたが、感染者が急増した7月末から8月初頭にかけて再び隔離期間が設けられるとともに、ホノルル市は8月27日から9月23日まで2回目となるロックダウンを実施した (Lund, 2021, March 26)。

¹ ハワイ語の文字起こしをしてくださった研究協力者の横尾有子さんに感謝申し上げる。本稿は科研費基盤研究(C)「ハワイ語を事例とする危機言語の世代間継承とメディア利用に関する談話分析的研究」課題番号21K00511による成果の一部である。

この頃、ハワイ語イマージョン教育ではどのような対応がされたのだろうか。再活性化運動の中心にいる Wilson (2020, May 19) によると、イマージョン教育を行う学校も州の他の学校と同様に対面授業からオンラインへの切り替えが実施された。言語再活性化のエンジンとしての役割を持つ学校の対面授業がないという危機的な状況の中、家庭内でのハワイ語使用が増加したり、必ずしもハワイ語が流暢でない保護者がよりハワイ語学習に取り組んだりすることで従来の教育が補完された側面もあったようである。また、保護者たちが自発的にオンラインで集まり、ハワイ語で会話をしたり、歌を歌ったりする場を設けたことが報告されている。

3 節で説明する通り、本稿で扱うデータは 2020 年 8 月に配信されたウェビナーであり、参加者たちが置かれていた当時の社会状況が、上述のようであったことを押さえておきたい。

2.2 コンピューターを介した談話、コロナ禍の新たな行動規範、ハワイ語

本稿でウェビナーにおける相互行為を分析するために、関連する先行研究を概観し、分析の枠組みを設定しておきたい。まず、Cameron (2014) は談話分析の観点から Computer Mediated Discourse (CMD) という概念を提示した。しかし、対面のやりとりとコンピューターを介したやりとりの繋がりについて、両者の間に断絶を想定することに注意を促しており、CMD のみかけの新規性に惑わされることなく、分析をする必要性を指摘している。TV ニュース番組における split-screen shots を分析した池田 (2009) は、番組ホストとゲストがどのように画面上に表示されるか、それが会話とどのように結びついているかという視覚的考察を行なった。TV という従来のメディアに関する研究からの知見と比較すると、ウェビナーにおける複数のパネリストの画像は、どれも均等な大きさで、画面右側に、上下に配置されている場合が多く、パネリスト間の関係性が対等であるという印象を生み出しているとも言えるかもしれない。参加者の画面が均等な大きさを表示されるという意味では、Skype も同じ特徴を持ったサービスである。Skype を介した会話を対象とするマルチモーダルな会話分析あるいは言語人類学からの先行研究では、MCA や視線、活動が行われる複数の空間を考慮に入れた分析が行われてきた (e.g., Greer, Brandt, Ogawa, 2013; 池田, 2017; 砂川, 2019)。同様に、Rintel (2015) は Skype のように一般的なソフトウェアではないが、類似の機能を持つソフトウェアを介して会話をする恋人間の親密なやりとりを分析し、参加者たちが技術上の問題 (音声の乱れや画面のフリーズ) にどのように対処するか論じている。Skype 以外に比較的よく研究されている CMD 研究の一例としては、オンラインゲームにおける相互行為 (Keating and Sunakawa, 2010; Rusk and Ståhl, 2020) や有名ゲーマーとファン間のやりとり (Graham, 2019) についての研究を挙げることができる。

以上のような CMD に関する諸研究をニューノーマルと関連する相互行為の分析にどのように接続していくか考える上で参考になる視点を提供しているのが Katila *et al.* (2020) である。Katila *et al.* (2020) はコロナ禍の新たな行動規範の元で、例えば各国首脳が外交場面で必須の挨拶を行う際に肘を触れ合わせる行為で代替するやりとりを分析しているが、これは新たな現実に対処するためどのように従来の規範をリソースとして用いているかを示す例ということになる。

ハワイ語による CMD 研究としては、ラジオ番組における相互行為研究 (古川, 2019; Furukawa, 2019; 古川, 2022) があり、L2 としてのハワイ語、MCA や構築された対話の使用に着目して、言語・人々・大地の連関を創出する行為が分析されてきた。旧メディアにおけるハワイ語使用に関する知見は、ハワイ語の L2 使用者であるホストとゲストがやりとりするという類似の参加の枠組みを持つウェビナーにも適用することができる。換言すると、本稿はメディアにおけるハワイ

語使用, L2 としてのハワイ語, ニューノーマルという文脈という 3 点を掛け合わせることで, CMD 研究にハワイ語を含む多言語使用の観点から貢献することを目指す試みである。

3. 方法—ウェビナー‘Ai Kōle の相互行為分析—

前節では, ハワイ州でさまざまな対策が採られ始めたのは, 2020 年 3 月中旬以降であったことを確認したが, 本節ではハワイ先住民教育システムの協働的な開発と強化をミッションとして掲げる組織や学校のネットワークである Kanaeokana (カナエオカナ) も, まさに同年 3 月から一連のウェビナーを開始したことを付け加えたい。これらは Zoom, Facebook, YouTube, Vimeo など配信され, その内容は主に講演や複数人によるパネルディスカッション, 自由なトークであった。2023 年 4 月現在, 継続中のものもあれば, 休止中のものもあるが, 配信が行われた期間は 2020 年に集中している。

開始した順に列挙すると以下の 6 つのウェビナーがある: (1) Lei Ānuehue (2020 年 3 月 20 日開始, 10 月までに 71 回配信), (2) ‘Ai Kōle (2020 年 4 月 17 日開始, 12 月までに 43 回配信), (3) He Huewai Ola (2020 年 5 月 1 日開始, 7 月までに 10 回配信), (4) Aloha Rising (2020 年 5 月 7 日開始, 6 月までに 6 回配信), (5) Nā Mo‘olelo Kahiko (2020 年 5 月 12 日開始, 7 月までに 12 回配信), (6) Polynesian Ancestral Knowledge (2020 年 6 月 17 日開始, 8 月までに 11 回配信)。² これらは文化, 言語, 健康, 物語などをテーマとしたウェビナーで, ハワイ語が使われることもあるが, (2)以外は英語を主たる使用言語としており, ハワイ語だけで運営をしているのは (2) の‘Ai Kōle (アイコレ) のみである。

本稿ではハワイ語ウェビナー‘Ai Kōleに着目する。これはハワイ語を使用言語とする約 60 分のプログラムであり, Kanaeokana の委員会メンバーでもあるホストの‘Ekela Kani‘aupi‘o-Crozier がさまざまなゲストを迎えて行うトーク番組のような形式をしている。本稿では, ゲストにハワイ語再活性化運動の中心人物であるハワイ大学ヒロ校の Larry Kimura を迎え, 2020 年 8 月 15 日に配信され, Ka Ho‘ōla ‘Ōlelo Hawai‘i (ハワイ語再活性化) という見出しになっている Episode 25 をデータとする。過去動画はインターネット上で公開されており, この回も Facebook 上でログインせずに視聴できる (Kanaeokana 2020, August 15)。公開されている約 60 分の Episode 25 の動画全体を文字起こしし, その上で, 次節で引用する冒頭部分を会話分析の手法に基づいて詳細な記号化を行った。ほぼ全ての発話がハワイ語であるので, 各抜粋の上段にハワイ語, 中段に日本語の注解, 下段に発話全体の日本語訳を提示した。日本語訳作成にあたっては, ハワイ語発話の雰囲気をつできるだけ保持することを優先したので, 直訳調の箇所がある。

Episode 25 を分析対象として選択したのは, この回における参加の枠組みが年配のゲストとホストがやりとりを行うという従来のラジオ番組における参加の枠組みと類似しており, 先行研究からの知見を活かすことができるからである。ホストの‘Ekela Kani‘aupi‘o-Crozier は 1990 年代にハワイ語の遠隔学習番組 Kulāiwi (クライヴィ)のホストを務めていた。また, ゲストの Larry Kimura は 1970-80 年代にハワイ語のラジオ番組 Ka Leo Hawai‘i (カ・レオ・ハヴァイイ)のホストを務めていた。かつて Kimura の番組 (と別のホストによる同名の後継番組) に Kani‘aupi‘o-Crozier が出演したことがあるとともに, 両者はかつて教師と生徒という関係にあり, その点は本稿が分析する Episode でも話題になっていた。結論を先取りすると, ニューノーマル下で配信

² 出典は Kanaeokana の Program schedule.

された‘Ai Koleにおいて、参加者である Kimura と Kani‘aupi‘o-Crozier は、こうした両者の関係性を話題にするとともに、資源として利用し、相互行為としてのウェビナーを展開していく。

4. 分析—感謝の表明をめぐる連鎖—

本節では‘Ai Kole の Episode 25 を分析する。コロナ禍で社会に広まったウェビナーでは正式な開始時間まで、講演者やファシリテーターが会話をしている様子がしばしば観察される。‘Ai Kole でもそうしたウェビナーのように、Kani‘aupi‘o-Crozier (以下 EK)と Kimura (以下 LK)が会話を行う。公開されている動画の開始から7分ほど経過した時点で定刻になり、ホストの EK が LK に改めて挨拶をすることにより、イベントの公式な開始時間を指標している。以下では、挨拶の後、ゲストの LK からホストの EK へ向けられた感謝で始まる1分40秒ほどの継続したやりとりを分析していく (抜粋 1-4)。

まず、最初の抜粋では、ゲストの LK がホストの EK に感謝を述べるのだが (ll. 1, 4-7, 9), EK が LK に感謝で応答し (l. 10), LK が 11 行目からユーモアを含む応答をしている。この抜粋では、特に 11 行目以降で LK が何をしているかに着目したい。

抜粋 1 「今は映像があるので、今日のために良い服を着ないといけません」

- 1 LK: ma[halo:,
感謝する
- 2 EK: [.h
- 3 EK: \$‘o ia= wau:\$ **
話題 それ 私
「つまり、私は」
- 4 LK: =aku iā ‘oe ‘Ekela keia .h
方向詞 に あなた エケラ これ
- 5 LK: ho‘oikaika i loko o ka ‘ōlelo (.2),
強化する を 中 の 冠詞 言語
- 6 LK: a hiki i kēia lā.
まで 着く に これ 日
- 7 LK: mahalo .h kou mālama ‘ana (i) kēi(a) papahana.
感謝する あなたの 世話すること を この プロジェクト
「エケラ、あなたに感謝します。ハワイ語を今日の状態にまで強化してくれて。
あなたがこのプロジェクトをしてきてくれたことに感謝します。」
- 8 (.5)
- 9 LK: [a: me-
そして と
- 10 EK: [nau nō i ho‘opaipai mai iā mākou.
あなた 強調 完了 励ます 方向詞 を 私たち 3+
「あなたが私たちを励ましてくれたのです。」
- 11 LK: .h ‘a:e. (i) keia wā, (noa) ke ki‘i.
はい に この 時代 自由 冠詞 絵
- 12 LK: pono wau e komo i ka lole maika‘i
すべき 私 分詞 着る を 冠詞 布 良い
- 13 LK: [o kēia lā. (mea)
の この 日 もの
「はい。今は映像があるので、今日のために良い服を着ないといけません。ほら。」
- 14 EK: [hhhhhhh
- 15 LK: KCCN ma mua, ‘a‘ohe po‘e nānā mai:.
KCCN に 前 なし 人々 見る 方向詞

- 「KCCN の時は、見ている人々はいませんでした。」
- 16 EK: \$pololei. hiki [ke\$ komo
正しい 可能 冠詞 着る
- 17 LK: [*
- 18 EK: (i) ka pālule tī welu[welu
を 冠詞 シャツ T 破れた
- 19 LK: [h
- 20 EK: [‘a‘ole piliki↑(h)a.
なし 問題
「そうですね、破れた T シャツを着ていても大丈夫でした。」
- 21 LK: [h h h h
22 (.)
- 23 EK: [↑h h h h [hh
- 24 LK: [h h h .h [akā .h kēlā manawa ↓a: (.)
しかし あの 時
- 25 LK: ko:mo i nā lole:, a: (.) ho‘onani nō. ‘a:e.
着る を 冠詞 布 綺麗にする 強調 はい
- 26 LK: no ka [mea ho‘okipa ‘ia
ため 冠詞 人 訪れる 受身
- 27 EK: [ē ē.
はい はい
- 28 LK: .h nā kūpuna o kākou.
冠詞 年配者 の 私たち 3+
「しかし、当時は、綺麗な服を着ないといけませんでした。クプナをゲストとして
お迎えするために。」
- 29 (.3)

ゲストの LK はホストの EK に感謝を述べ (II. 1, 4-6), さらにもう一度感謝を述べる (I. 7). 短い沈黙の後 (I. 8), LK は発話を再開するが (I. 9), EK の発話の開始 (I. 10)と重複したため、途中で発話を打ち切っている (I. 8). 10 行目で EK が行なっているのは、LK によって感謝された自分の行為に対して、そもそも LK による励ましがあつたのだと述べることで、LK に感謝を返すということである。(抜粋では示していないが、イベントの開始までの数分間の待機時間に、ホストの EK はゲストであり、自分の教師であり、年配者である LK への感謝を述べていたので、イベントの開始を指標する挨拶の直後に LK が EK に感謝を述べたのは、待機時間に述べられていた感謝に対する応答ということになる。)

しかし、10 行目で EK が再び LK に対する感謝を表明すると、11 行目で LK は感謝を返すのではなく、EK からの感謝を受け入れると (i.e., ‘a:e 「はい」), ユーモアを含む発話で話題を変えている (II. 11-13). 話題を変えることで、自分が感謝され続ける状況を転換させようとしたと考えられる。ユーモアを含んでいることは、EK が笑いで応答していることで観察可能になっている (I. 14). なぜ LK の発話がユーモアになるかという点、LK が続けて述べているように、かつて自分が 1970-80 年代に KCCN (I. 15) というラジオ局でホストを務めていた番組と現在の動画によるウェビナーを比較しているからである。EK は LK が話題転換として導入した 2 つの状況の描写に笑いを含んだ発話で同意するだけでなく (I. 16), 笑いをエスカレートさせる (あるいは描写を格上げする) 描写を追加し (II. 16, 18, 20), 自ら笑いを産出している (I. 23). EK は LK のラジオ番組に関する知識を有する共同体のメンバーとして振る舞っているともいえる。しかし、LK はこの後、話題となっている内容の理解を訂正し (II. 24-26, 28), ラジオは音声のみでリスナーにはわからないから、ホストはどのような格好をしても問題ないというのはあくまでジョークである

と仄めかしている。LK がホストを務めていたラジオ番組は多くの場合、ハワイ語の母語話者であるクプナ (I. 28), つまり年配者をゲストとして招き、ハワイ語の記録と保存を目的としていたものであり、敬意を持ってクプナを迎えるために身だしなみを整えて迎える必要があった。

ここまで LK が比較し、EK が同意したのは、ラジオという聴覚メディアとウェビナーという映像メディアの違いであり、その違いに基づくジョークであった。しかし、LK が「今、この時代」(11 行目の (i) *kēia wā*) で指標しているのは、単にラジオ以降の映像メディアが中心となった時代だけでなく、このやりとりが行われている「今・ここ」、つまりコロナ禍でウェビナーをしているという 2020 年 8 月の状況も包摂していると解釈できるのではないだろうか。

LK が話題転換後、ラジオでの服装に関する理解の訂正を行うと、次の抜粋では EK が同意している (I. 30)。ここで注目したいのは、EK が再び LK に対して感謝を述べているという点 (II. 30-33), そして、それに対して LK が今度はユーモアによる話題転換ではない方法を用いて応答しているという点 (II. 34, 37-41) である。

抜粋 2 「あなたたち全員に、私たち全員に心から感謝します」

- 30 EK: tch 'a:e polole:i. .h no laila:,
はい 正しい ため そこ
- 31 EK: like me ka'u i 'ōlelo mua ai,
ように と 私の 分詞 話す 前 再帰
- 32 EK: nu:i (ko mākou) mahalo iā 'o:e
大きい 所有 私たち 3+ 感謝 に あなた
- 33 EK: no kau hana mai[ka'i, kau hana nui no mākou? .h
ため あなたの 仕事 良い あなたの 仕事 大きい ため 私たち 3+
「はい、そうですね。だから、私が先ほど言ったように、あなたの良い仕事、
私たちのためにあなたがしてくれた重要な仕事に対して、私たちはとても感謝
しています。」
- 34 LK: [o o o:
お お お
- 35 ? : °(yes.) °
はい
- 36 (.8)
- 37 LK: <mahalo nui loa> iā 'oukou (a) pau
感謝 大きい とても に あなたたち 3+ すべて
- 38 LK: no kākou a pa:u. .h
ため 私たち 3+ すべて
- 39 LK: 'a'ole nō ka: (.) tch a: ho'okahi o ka ka- (.4)
いいえ 強調 1 つ の 冠詞
- 40 LK: ke alu like. ((机を叩く音)) (.) ke alu nui. huli a mahi. .h
冠詞 協力 ような 冠詞 協力 大きい 回転 まで 耕す
- 41 LK: i loko [o (ka)
に 中 を 冠詞
「あなたたち全員に、私たち全員に心から感謝します。いや、一緒に協力して、
大きな協力があり、方向転換し、耕し、1 つに終わりました。中で。」
- 42 EK: [pololei.
正しい
- 43 (.2)
- 44 EK: polo[lei.=
正しい
- 45 LK: [ē.
はい

EK は 30 行目で「だから」 (no laila) を産出することで、LK が言及したクプナへの敬意を持った接し方 (身だしなみを整えること) とさらに自分が前に述べたこと (自分から年配者である LK への感謝) を関連づけて (l. 31), またもや LK に対する感謝を述べている (ll. 32-33). LK は EK によって繰り返される感謝の表明を予期せぬものとして扱っている (l. 34). 少し長めの間があり (l. 36), LK は抜粋 1 とは異なり、EK 個人ではなく、EK を含む人々への感謝を表明することで応答を始めるが (l. 37), さらに感謝の対象として自分自身も含めている (ll. 38-41). 重要なのは、1 人称複数を表す代名詞 mākou と kākou の使い分けである。どちらも「私たち 3 人以上」を意味するが、前者は聞き手を含まず、後者は聞き手を含むという違いがある。EK は mākou を用い、「私たち」から聞き手である LK を除外し、私たち若い世代が年配者である LK に感謝するという発話を産出していった。一方、LK が用いている kākou は LK と聞き手の EK を含む「私たち」を指標している。LK は抜粋 1 では EK 個人 (4 行目 'oe 「あなた」) に感謝を表明していたが、EK に感謝すると再び自分に対する感謝の表明が返ってくることを回避するために、抜粋 2 ではついに自分自身も含めてしまったと解釈できる。EK は LK に同意している (ll. 42, 44). 果たして感謝の表明が返ってくることは回避されたのであろうか。次の抜粋を見てみよう。

EK は LK の提案内容に賛同していたが (ll. 42, 44), 抜粋 3 では逆接の接続詞で発話を開始し (l. 46), LK の功績を述べ (l. 46), その中でやはり LK を除外する人称代名詞 mākou を用いて、「私たち」と年配の LK という二項対立を再提示している。

抜粋 3 「しかし、あなたが私たちを導いてくれました」

- 46 EK: =akā nau nō [i alaka'i mai iā kā- mākou,
 しかし あなた 強調 分詞 導く 方向詞 を 私たち 3+
- 47 LK: [(ē)
 はい
- 48 EK: [so. .h he maha-
 だから 冠詞
- 49 LK: [hhhhhhh
- 50 EK: he mahalo [nui *.
 冠詞 感謝 大きい
 「しかし、あなたが私たちを導いてくれました。だから、感、感謝します。」
- 51 LK: [hhh

EK は 48 行目で英語の接続詞に切り替えてから、改めて明示的に感謝を述べている (ll. 48, 50). つまり、LK による話題転換 (抜粋 1 の 11 行目) や感謝の対象の再設定 (抜粋 2 の 37, 38 行目) にもかかわらず、結局、EK は改めて LK に対する感謝の表明を行っており、LK はそれを回避することができなかった。EK が明示的に改めて感謝を述べようとする発話は、LK の笑いと重複しており (l. 48), LK は 46 行目で EK が LK の功績を述べた時点で、次に何が述べられるか理解したことを示すとともに、感謝が繰り返し表明されることを笑うべき事柄として扱っている。なお、EK による感謝は LK の笑いと重複したため、EK は一旦発話を打ち切り (l. 48), 笑いの後で、感謝の表明をやり直している (l. 50). EK による感謝のやり直しは、この場で明示的に感謝を表明する必要性に関する EK の理解、そしてハワイ語再活性化における LK の功績に対する EK の態度が示されていると解釈できる。ここまで番組冒頭の挨拶からホストとゲストによる感謝の表明の連鎖と進んできたが、次の抜粋では別の活動へと移っていく。

EK は「それでは」 (no laila) と感謝の表明に区切りをつけ (l. 52), 別の活動に移ることを指標する. ここからは EK が画面共有されている複数の写真に言及し (l. 53), それらについて語るように LK に依頼する連鎖が続く. 特に 56 行目以降の EK による依頼の仕方にニューノーマルへの対処が示されている点に注目したい.

抜粋 4 「あなたの物語を続けてください」

- 52 EK: .h no laila .h (.2)
 ため そこ
- 53 EK: e:ia kekahi mau ki'i <nani loa> au i ho'ouna mai ai.
 ある ある 複数 写真 美しい とても 私 分詞 送る 方向詞 再帰
- 54 EK: he mau ki'i kahi:ko (l)o[a].
 冠詞 複数 写真 古い とても
- 55 LK: [hhh]
- 56 EK: no laila .h u:m .h 'a'ole makemake wa:u e: nīnau aku iā 'oe
 ため そこ ない 欲する 私 分詞 尋ねる 方向詞 に あなた
- 57 EK: just ho'omau 'oe me kau mo'olelo.
 だけ 続ける あなた と あなたの 物語
- 58 EK: a i: inā (.4) 'upu- kupu a'e kekahi mana'o .h
 そして もし 望む 起きる 方向詞 ある 考え
- 59 EK: kekahi nīnau a laila nīnau aku iā 'oe=akā, .h
 ある 質問 そして そこ 尋ねる 方向詞 に あなた 方向詞
- 60 LK: [***]
- 61 EK: [no'ono'o kēia manawa
 熟考する この 時
- 62 EK: ha'i mai, ha'i mai kau mo'olelo (.) ke 'olu'olu?
 いう 方向詞 いう 方向詞 あなたの 物語 もし 穏やか
 「それでは, (画面に) とても美しい写真が表示されていますね. とても古い写真です. だから, 私はあなたに質問をしたくありません. ただあなたの物語を続けてください. そして, もし, 何か考え, 何か質問が浮かんだら, 質問をします. しかし, 今はよく考えているところです. 話して. あなたの物語を話してください.」
- 63 (1.0)
- 64 LK: 'ae.
 はい

EK は画面共有されているゲスト LK の幼少期や家族の写真に言及すると (ll. 53-54), 「だから」 (no laila) と述べることで (l. 56), 写真の性質 (美しさと古さ) を理由として, ホスト主導の活発なやりとりをするインタビュー形式ではなく, ゲストである LK に自分の物語 (mo'olelo) を語ってほしいと依頼している. ここで EK が暗示しているのは, 写真には特別な物語が含まれているはずなので, ホストの質問でその物語が紡がれることを阻害することは好ましくなく, ゲスト自らが主体的にその物語を紡いで共有してほしいということである. 一見インタビューアーとしての立場を放棄するよう見える EK の依頼は, 冒頭から繰り返し行われてきたクプナ (年配者) への敬意の示す行為と符合しており, ハワイ先住民の価値観としてクプナを質問攻めにすることは適切さを欠く行為であるので, むしろ望ましいのは物語に耳を傾け, 「よく考える」 (l. 61, no'ono'o) ことであるという理解が示されていると解釈できる. LK は依頼を受け入れ (l. 64), 語りを開始する (抜粋なし).

まとめると、本稿が指摘する分析上の重要な点は、クプナに敬意を示す行為が参照する従来の規範が、コロナ禍で生じた新たな状況への対処にも利用されている可能性である。コロナ禍で広く導入された Zoom のような Web 会議サービスやその他 Kanaeokana (3 節参照) が配信のプラットフォームとしている Facebook や YouTube のライブストリーミングでは、参加者が同時に発話すると音声聞こえにくい状況が発生するという経験が (‘Ai Kole の Episode 25 までに) 蓄積されていたはずで、そのため、EK から LK への物語の依頼は、話者はできるだけ発話の重複を避け、一人ずつ語るようにすることが望ましいという理解に基づく行為であるのではないだろうか。つまり、ホストの EK は、ゲストの LK への敬意を示すと同時に、オンライン番組における音声の乱れという潜在的な問題を回避し、物語の「快適な」視聴環境を設定しているのである。

5. 結論—新しい現実に対処する多機能な行為—

ここまでコロナ禍の 2020 年に始まったハワイ語ウェビナー ‘Ai Kole におけるホストとゲストのやりとりを分析してきた。本稿で分析した会話は、ウェビナー開始前の雑談から、ウェビナー開始へと移行する場面であり、特に冒頭部でホストの EK がゲストの LK と互いへの感謝の表明を繰り返す連鎖に着目した。しかし、本稿では、一見感謝の表明の応酬に見えるやりとりがホストとゲストの関係性（元学生と教師、次世代とクプナ、過去のラジオ番組ゲストとホスト）によって、より入り組んだ構造を持つことを明らかにした。ホストの EK が繰り返す感謝の表明を回避するため、ゲストであり年配者の LK はユーモアのある話題転換をしたり、ハワイ語特有のリソースを用いて感謝の対象を再設定したりするのだが、EK はそれでも LK に対する感謝の表明を継続し、その上で、LK に物語ることを依頼していた。以上に加え、本稿が主張したのは、ハワイ語を主たる使用言語とするウェビナーにおいて、(1) LK による話題転換と (2) EK による LK への敬意の表明と物語の依頼は、コロナ禍で生じた新たな現実・問題への対処が内包された多機能な行為であるという点だった。

参考文献

- Cameron, D. (2014). Computer-mediated discourse analysis. D. Cameron & I. Panović (Eds.), *Working with written discourse* (pp. 112-129). London: Sage.
- 古川敏明. (2019). 「第二言語としてのハワイ語使用に関する会話研究: 母語話者カテゴリー Mānaleo をめぐるやりとり」 『応用会話分析研究—制度的会話におけるカテゴリー化と連鎖構造 言語文化共同研究プロジェクト 2018—(pp. 1-10)』 大阪大学大学院言語文化研究科
- Furukawa, T. (2019). Place and membership categorization in a Hawaiian language radio show. *Pragmatics & Society*, 10(3), 375-398.
- 古川敏明. (2022). 「“He haole ‘oe?”—ハワイ語の引用と構築された対話の詩的構造化が指し示すリアリティー」 片岡邦好・武黒麻紀子・榎本剛士 (編) 『ポエティクスの新展開—ブルリモデルな実践の詩的解釈に向けて—(pp. 101-127)』 ひつじ書房.
- Graham, S. L. (2019). A wink and a nod: The role of emojis in forming digital communities. *Multilingua*, 38(4), 377-400.
- Greer, T., Brandt, A., & Ogawa, Y. (2013). Identity in intercultural interaction: How categories do things. *The 2013 PanSIG Conference Proceedings*, 155-164.

- 池田桂子. (2009). 「マスメディアと会話分析—CNN Larry King Live Show の視覚的考察(Visual Analysis)—」 『言語文化研究叢書』 8, 1-5.
- 池田佳子. (2017). 「Web ビデオ会議—関与性を指標する相互行為リソースの一考察—」 片岡邦好・池田桂子・秦かおり (編) 『コミュニケーションを枠づける—参与・関与の不均衡と多様性— (pp. 69-88)』 ひつじ書房
- Kanaeokana. (2020, August 15). *Ka ho‘ōla ‘ōlelo Hawai‘i* [Video file]. Facebook.
<https://www.facebook.com/Kanaeokana/videos/756129955167150>
- Katila, J., Gan, Y., and Goodwin, M. H. (2020). Interaction rituals and ‘social distancing’: New haptic trajectories and touching from a distance in the time of COVID-19. *Discourse Studies*, 22(4), 418-440.
- Keating, E. and Sunakawa, C. (2010). Participation cues: Coordinating activity and collaboration in complex online gaming worlds. *Language in Society*, 39, 331-356.
- Lund, C. (2021, March 26). Timeline: It’s been one year since Hawaii issued its first stay-at-home order.
<https://www.hawaiinewsnow.com/2021/03/26/timeline-its-been-one-year-since-hawaii-issued-its-first-stay-at-home-order/>
- Rintel, S. (2015). Omnirelevance in Technologised interaction: Couples coping with video calling distortions. Fitzgerald, Richard. & Housley, William. (Eds.), *Advances in membership categorization analysis* (pp. 123-150). Los Angeles: SAGE.
- Rusk, F., & Ståhl, M. (2020). A CA perspective on kills and deaths in Counter-Strike: Global Offensive video game play. *Social Interaction. Video-Based Studies of Human Sociality*, 3(2).
<https://doi.org/10.7146/si.v3i2.117066>
- 砂川千穂. (2019). 「メディアとコミュニケーション」 井出里咲子・砂川千穂・山口征孝『言語人類学への招待 (pp. 205-230) 』 ひつじ書房
- The new normal. (2020, July). *The Economist*, 436(9201), 54-56.
- UH News. (2020, March 18). President’s Message: Online courses extended for remainder of semester, other important updates. <https://www.hawaii.edu/news/2020/03/18/presidents-message-march-18-updates/>
- Wilson, W. (2020, May 19). Hawaiian revitalization growth under quarantine. <https://catedra-unesco.espais.iec.cat/en/2020/05/19/45-hawaiian-revitalization-growth-under-quarantine/>
- Wu, N. (2020, June 8). The new normal for offices will include staggered shifts, limits, more remote working. *The Honolulu Star-Advertiser*. <https://www.staradvertiser.com>
- Zunin, I. (2021, January 2). Column: The state of our times will be the new normal. *The Honolulu Star-Advertiser*. <https://www.staradvertiser.com>

文字書記号一覧

- * 聞き取り不可の一拍分の発話